

# 「接触感覚から遠隔感覚」と「遠隔感覚内」の 意味転用に関する一考察

－「共感覚的比喩」を支える複数の動機付け－

武藤 彩加

キーワード 接触感覚、遠隔感覚、共感覚的比喩、意味転用、動機付け

## 1 はじめに

本稿で分析の対象とする「共感覚的比喩」とは、「五感（触覚、味覚、嗅覚、視覚、聴覚）」内において、ある感覚領域を表す語が別の感覚領域に転用されるという比喩表現をいう。この共感覚的比喩について、山田仁子（1993）には次のような説明がある。

共感覚比喩とは、“甘い声”“暖かな色”というように、聴覚経験であるはずの声を“甘い”という味覚の形容詞で表したり、視覚経験である色を“暖かな”という触覚の形容詞で表すような、ある感覚経験を本来他の感覚経験を表すはずのことばで表現するものを言う。

（山田（1993）、pp. 31-32）

従来、「五感を表す語」における「感覚間の意味転用」については、主にこの共感覚的比喩という観点から分析されてきた。

そして共感覚的比喩は、従来、「メタファー」<sup>(1)</sup>の一種とされてきた。この点について、池上（1985）には次のような指摘がある。

---

<sup>(1)</sup> 本稿で用いる「メタファー・メトニミー」という用語については、初山（1997）の定義に従う。初山では、佐藤（1992=1978）、瀬戸（1986）などを踏まえ、次の様に定義している。

メタファー：二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

メトニミー：二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。（初山（1997）、p. 31）

意味の類似性に基づく転用として興味あるものに、ある感覚領域を表わす語が別の感覚領域に転用される場合がある。一般に共感覚 (synaesthesia) と呼ばれるものがそれで、sweet voiceにはこの種の転用がみられる。(中略)しかし、このように感覚の種類は異なっても、味覚について<甘い>といえる場合の感じと聴覚についてのある種の印象の間に平行性が感じられることから転用が起こっているわけである。

(池上 (1985)、p. 99、下線は引用者)

ここで挙げられている‘sweet voice (甘い声)’などの共感覚的比喩表現における、異なる感覚間に存在する「ある種の印象間の類似性」とは具体的に何であるのかについては、従来、十分に検討されてきていない。この点について、西尾 (1972) に次の様な言及がある。

形容詞のばあい、たとえば「あまい砂糖—あまい匂い」「きいろい花—きいろい声」のような一種の感覚的・印象的な類似にもとづく、意味の派生関係が多いようである。たとえば「うで」から派生して「電柱のうで」「うでがにぶる」というときの「うで」の意味は、腕の形・機能との類似から生じ、その類似において基本的意味と結びついていることは具体的に説明しやすい。しかし、上の「あまい」「きいろい」の派生義は、感じが似ているという以上に具体的な説明は、(対象についての深い知識がないと、あるいはあっても) なかなかむずかしい。(西尾 (1972)、p. 7、下線は引用者)

ここで西尾は、共感覚的比喩表現 (ここでは味覚形容詞「あまい」における「味覚」から「嗅覚」への転用、及び「きいろい」における「視覚」から「聴覚」への転用) について、「具体的な説明がむずかしい」としている。すなわち、「あまい砂糖」から「あまい匂い」などへの意味の転用を可能にするメカニズムについては、検討されるべき未解決の課題なのである。

そこで本稿では、従来「共感覚的比喩」として括られていた現象の分析を行うことにより、五感内における各感覚間の「表現の貸し借り」を可能にするメカニズムとは何かという課題について考察する。

## 2 分析の前提—「接触感覚」と「遠隔感覚」—

山田進 (1996) では、言語記号ないし言語表現と事物との関係をどう捉えるかについて、「事物」・「概念」・「言語の意味」間の関係に言及している。そして

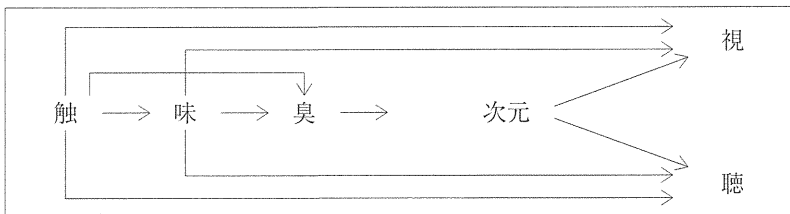
われわれが「識別」するのは「外界の事物」ばかりでなく、「人間とは独立に存在しえない」ものも数多く存在するとし、例として「痛み」を挙げている。

「知覚する主体」がなくなれば痛みそのものもなくなるはずだから、痛みそのものは人間と独立には存在しえない。「痛み」のような「外界にないものごと」を識別する際に用いている「何か」は「痛みの特徴」であるから、この点で「外界の事物」を識別する際の「概念」と同種のものであると言える。異なるのは、識別の対象である痛みそのものが外に取り出せないこと、具体物のように触ったりできないこと、他人の痛みは経験できないこと、また、「痛みを表すもの」が視覚や聴覚などの知覚によりとらえられる形で表されることはないことなどである。痛みに限らず、「感覚」は総じてこのような性質を持つ。(山田(1996)、p. 1097、下線は引用者)

一方、国広(1989)は、こうした「感覚の枠組み」には、我々の外界に対する「認知」の仕方の違いが関わるとしている。

目に何か映っているとき、カメラのフィルムに比すべき網膜に像が映っているわけであるが、我々は網膜に像が映っているとは認知せず、その像の元の物が外界に存在しているように認知する。聴覚の場合も事情は平行していて、実際には鼓膜が震動しているのであるが、そうとは認知せず、その像の元の物が外界に存在しているように認知する。この現象は感覚心理学では「遠隔感覚」ととらえられてきたものであるが、認知科学的には「外界投射 (projection to the outer world)」と呼ばれる。これに対して他の接触感覚の場合は肌なり舌の表面が何かを感じているというふうに感覚器官の働きがはっきりと意識される。(国広(1989)、p. 31)

「五感」における、感覚のこのような性質の相違から、国広では「共感的比喩」について、次の図を示し結論付けている。



(国広(1989)、p. 28)

最初に示した比喩の体系の中に「次元」という一見感覚とは異なる要素がはいりこんでいたが、これは視覚の外界投射の働きの結果であると説明することができる。つまり「次元」というのは本来視覚の中に含まれていたものということである。そうすると、結局共感覚的比喩というのは「接触感覚→遠隔感覚」という図式に単純化できることになる。

(国広 (1989)、p. 31、下線は引用者)

ここで国広は、「感覚器官の働きがはっきりと意識される」触覚的領域、すなわち「触覚」、「味覚」、「嗅覚」を「接触感覚」、そうではない「視覚」と「聴覚」を「遠隔感覚」としている。

以上の指摘に従い、本稿では、五感内における「接触感覚」と「遠隔感覚」を分析の指標とする。そして五感内を「接触感覚から遠隔感覚」、「遠隔感覚内」という二つに分類した上で考察を行う。

### 3 「接触感覚」から「遠隔感覚」への転用

#### 3.1 先行研究

触覚を表す形容詞の一つに「カタイ」がある。これが「視覚（例えば「カタイ線」等の表現）や「聴覚（例えば「カタイ声」）」を表す場合、「共感覚的比喩により」意味が転用されるというのが、従来の説明であった。

一方、初山（1994）では、形容詞「カタイ」の多義構造を明らかにするなかで、感覚間の意味転用にも言及している。初山から、五感に関する部分のみを以下に要約する。

- ・「触覚」…多義的別義（1）：ダイヤモンド／鉄はカタイ  
さて、ある物体について、カタイという場合、「手でさわる／押す」等、<外部から力を加える>ことが前提になる。
- ・「聴覚」…多義的別義（5）：カタイ言葉、カタイ話  
まず、このカタイによって描写されている対象は、「表現／言葉／文体」等の<言語表現>、あるいは「話」等の<言語表現によって表された内容>である。
- ・「視覚」…多義的別義（7）：カタイ頬の線  
さて、カタイのこの多義的別義も、前節のカタイ（多義的別義（6））と同様、換喩によって成り立っていると考えられる。つまり、「触覚的にカ

タイもの（基本義）は「視覚的に直線的な輪郭を持つ」という換喩が成り立つ基盤があるために、「視覚的に直線的な輪郭を持つ」ものに対してもカタイで表すことができるということである。

例えば、「直線的な輪郭を持つ線」は「触覚的にカタイ」ということを経験的に知っているからであるということになる。

（初山（1994）、p. 75-88より要約、下線は引用者）

以上の様に、ここでは、「触覚」を「基本義」とする形容詞「カタイ」が、他の感覚（聴覚、視覚）へ転用する際の比喩のメカニズムについての分析があるが、共感的比喩についての言及は全くない。つまり、共感的比喩という概念は無くとも、「カタイ」の多義的別義間の意味的関連性は、記述可能であるということになる。そして従来「共感的比喩」とされ、それ以上の分析はされてこなかった「触覚」から「視覚」「聴覚」への意味の転用について、別の観点で更に説得力のある説明が為されている。これは、「カタイ」以外の五感を表わす語についても、更なる分析の必要性を予感させるものであると思われる。

そこで以下では、初山に倣い、「触覚」から「視覚」への意味の転用に「喚喩」、すなわち「メトニミー」がどう関わるのかを考察する。

### 3.2 「触覚」から「視覚」への転用

本節では、「五感を表すオノマトペ」において、「触覚を基本義とするオノマトペ」<sup>(2)</sup>が「視覚」へ転用するケースについて、实例に基づき分析する。以下で先ず、それぞれの「基本義」である「触覚表現」を確認する。

- (1) 青林工藝舎版は表紙の絵柄は同じだが、カバーの紙質がツルツルした手触りの紙に変更されるなど、若干異なる。

(<http://www.tk.airnet.ne.jp/tshibata/karasawa/kinmirai.htm>)

- (2) どちらも使った後はザラザラした手触りが無くなり、さらさらになります。

(<http://www.tworks.co.jp/~tada/log/geobook9.html>)

- (3) 「和紡布」で織り上げた少々ごわごわした感触の作衣です。

(<http://www.kcn.ne.jp/~hozumiya/samue.htm>)

- (4) 春作業が早く進んだ今年、農家では、この日の為に作業を残すなど配慮してくれていて、田植えでは生徒達がヌルヌルした感触に喚声を上げながらも1株1株丁寧に苗を植えていました。

(<http://www.hana.or.jp/nakasen/kouhou/k9806/ryoko.html>)

<sup>(2)</sup> 「基本義の認定の仕方」など、詳しくは武藤（2000）参照。

いずれも、「手触り」あるいは「感触」という語が下接することから、「触覚」経験を表す表現であることが確認できる。

そしてこれら「触覚」表現が「視覚」へと転用された例が、以下である。

- (5) 扉の外には廊下があり、廊下には女が立っていた。(中略) スーツは仕立ての良いつるつるとした生地で、彼女の顔もそれと同じくらいつるつるしていた。

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』、p.29)

- (6) 二段ベッドの上の段 寝っ転がるとすぐそこに いつもは遥かてっぺんにある 天井が見えた コンクリートかな ザラザラの肌

([http://www.hf.rim.or.jp/~bell/koba\\_25.htm](http://www.hf.rim.or.jp/~bell/koba_25.htm))

- (7) 由美子はシーツをたぐり寄せると、ベッドの隣で煙草をふかしている白髪まじりの男を、もう一度じっくりと観察した。50代だろうか。決して少なくはない、ごわごわした髪の毛を乱雑に横に分けている。

(<http://www2.pref.shimane.jp/police/ac/ENJO/syouse3.htm>)

- (8) 岸際では水草に、柘榴の実にも似た半透明でヌルヌルした奇怪な物体が、びっしりと群れている。(中略) 不思議そうに覗き込む私に姉は、ヌルヌルした物体はカエルさんの卵でおたまじゃくしはカエルさんの子供で、大きなおたまじゃくしはガマガエルだと教えてくれた。

(<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Gaien/4648/stdays/stday1.html>)

以上に挙げた例においては、「触覚」での経験を基盤にして「視覚」表現が成り立っていると考えられる。つまり、「ツルツル／ザラザラ／ゴワゴワ／ヌルヌル」したものが固有に持つ独特の形状から、それを「視覚的に」認知しただけで(すなわち触らなくても)、それが触ったら「ツルツル…している」という推測が成り立つのである。すなわち、ある種の形状を「見る」ことにより、それが「ある種の触感を持つ」ということを「経験的に知っている」ことにより、視覚表現が成り立つと考えられる。

以上、「触覚」から「視覚」への意味の転用に、「触覚」と「視覚」の経験的基盤に基づく「メトニミー」が関与する点を指摘した。

### 3.3 「視覚」の「触覚」性

前節までの分析と、従来の「感覚論」に関する研究との関連について、ここで若干触れておく。佐々木(1987)では、従来主張されてきた「感覚の縦割り理論」<sup>(3)</sup>や視覚優位の「層理論」<sup>(4)</sup>に対し、「見る」ことを「触覚のモデル」

で説明する数多い試みを紹介している。その1つとして、パークリ (Berkeley (1709)) を挙げ、「我々の認識の他感覚性」を説明している。

通常、視覚に属するとされる距離、大きさ、空間内の位置などの知覚が、筋肉感覚を含めた触覚からの借り物の経験によって作りだされていると結論づけた。このような視覚に特権的と考えられている性質は、実は触覚的な経験によって始めて可能になるものにすぎず、視覚に固有な対象の性質は光と色の2つしかない。見るということは、手で触れて対象を知ること、すなわち触覚的な対象把握の「徴し(マーク)」にすぎないというのだ。 (佐々木 (1987)、p. 37、下線は引用者)

また佐々木は、同種の指摘として更にコンディヤク (1948) を挙げ(「見ることの深層に、対象を触覚的になぞる過程が潜んでいる」)、視覚の背後に触覚が透けて見えるという現象を「なぞり」アクションと呼んでいるが、前節の分析における共感覚的比喩においても、「触覚(的領域)」から「視覚」への比喩の理解に、触覚的経験が関与する例が数多くみられる。ここから、「見るということは、手で触れて対象を知ること、すなわち触覚的な対象把握の「徴し(マーク)」にすぎない」というパークリの主張、及び「見ることの深層に、対象を触覚的になぞる過程が潜んでいる」というコンディヤクの主張の妥当性が確認できる。そしてこうした「視覚の触覚性」ともいうべき感覚の仕組みにより、触覚から視覚への意味の転用がはじめて可能になると考えられる。

## 4 「遠隔感覚」内の転用

### 4.1 先行研究

前節では、「触覚的領域」から「遠隔感覚」への転用に「経験的基盤に基づくメトニミー」が関わる例をみてきた。それでは果たして、「遠隔感覚内」の転用についても、同様に「メトニミー」によって支えられるのだろうか。この点について、Taylor (1995) では、「メタファーの下位カテゴリー」として「共感覚 (synaesthesia)」を挙げ、英語における共感覚的表現(‘sweet music’, ‘loud colour’, ‘black mood’, ‘the high notes on the piano’, ‘the meat smells high’) について、

<sup>(3)</sup> 感覚間相互の非関連性を強調する枠組み。

<sup>(4)</sup> 視覚を頂点とし、他の感覚系を従えるかたちの枠組み。注(3)とも、詳しくは佐々木 (1987) 他参照。

次の様に述べている。

If it were the case that metaphor were grounded, ultimately, in metonymy, then we would have gone a long way towards solving the ‘theoretical puzzle’ of similarity. There are, however, numerous instances of metaphor which cannot reasonably be reduced to contiguity.

Particularly recalcitrant are instances of a subcategory of metaphor, synaesthesia. Synaesthesia involves the mapping of one sensory domain on to another. (中略) It is doubtful whether attributes of these different domains get associated through metonymy. Neither is it plausible to propose metonymy as the basis for a mapping of the vertical dimension on to sensations of pitch (the high notes on a piano)<sup>5</sup> and smell (the meat smells high). (中略) The theoretical puzzle of similarity remains.

(Taylor (1995)、pp. 139–140、下線は引用者)

<sup>5</sup>One could argue that the correlation of high pitch with the high rate of vibration of the sound-producing body provides the metonymic basis for the conceptual metaphor. This correlation, however, does not form part of the world knowledge of the scientifically naive language user and cannot therefore provide an experiential grounding for the metaphor.

(Taylor (1995)、pp. 139、下線は引用者)

以上の様に、ここでは、挙げられている共感覚表現、とりわけ「高い音」等の表現については「経験的基盤に基づくメトニミー」では説明できないとしている。「高い音（声）」という表現は、「視覚（次元）→聴覚」、つまり「遠隔感覚内」の意味の転用である。ここで述べられている様に、「接触感覚から遠隔感覚」では共感覚的比喩の理解を支えた「経験的基盤に基づくメトニミー」は、「遠隔感覚」内では転用の動機付けに関与しないのであろうか。またそうなると、「遠隔感覚内」の意味の転用は、一体どの様なメカニズムによって支えられているのだろうか。

#### 4.2 「高い声」の分析

そこで以下では、「遠隔感覚内」の意味転用のメカニズムについて考察する。ケース・スタディとして「高い声」を挙げ、複数の観点からその動機付けを検討する。考察に先立ち、次の丹保（1990）を参考にする。

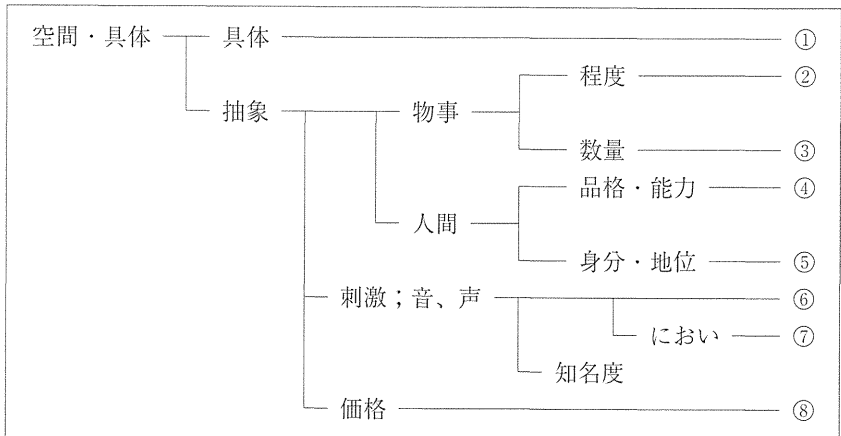


多義の広がりを考える上においては、少なくとも①直接的共感性によるもの、②評価的な要因によるもの、③特殊な要因によるもの、の三つを区別する必要があろう。(丹保(1990)、p. 16)

ここでいう「直接的共感性」とは、「各語の基本義からの直接的広がり」を指すものと思われ<sup>(5)</sup>、先に挙げた朮山(1994)とTaylor(1995)の指す「経験的基盤」は、この「直接的共感性」を指すと思われる。五感を表す語における意味の転用の動機付けについては、「直接的共感性」に基づく「経験的基盤」に加え、②の「評価的な要因」に依るものも存在すると考えられる。よって以下の「高い声」に関する考察においては、この二つの視点を分析の指標とする<sup>(6)</sup>。

「高い」の多義性に触れた研究には、丹保(1991)が挙げられる。丹保では、多義語「高い」について「辞書等に見られる概念的意味<sup>(7)</sup>分割基準体系」を次の様に示している。

(丹保(1991)、p. 21)



ここでは、「高い声(上の図では⑥に相当)」という表現については、抽象的な意味からの派生という形で記述されており、垂直次元という第一義からの直接

<sup>(5)</sup> 但しここで「直接的共感性」について、定義等、詳しくは示されていない。

<sup>(6)</sup> ③の「特殊な要因」については、「黄色い声」を例に挙げ、「慣用的表現とも言うべきもの」とし、「別に扱われるべき性質を持つ」としている。

<sup>(7)</sup> リーチ(1977)、p p. 12-15参照。

的な写像ではないとの解釈である。つまり、「高い声」と基本義である「垂直次元」との関わりについては、詳しく考察されていない。

以上の様に「高い」の多義性に関する研究においても、「高い声」という表現における、「声」と基本義である垂直次元（「高さ」）との関わりについては直接言及されておらず、「高い声」と「垂直次元」との関係は、従来明らかにされてきていない。先に挙げたTaylor (1995) で問題提起はされているが、これまでこの課題について検討した研究は、管見の限りない。

しかし我々が「キーの高い声」を耳にしたとき、その声と「高さ（基本義）」との間に、何らかの関係を感じることはないだろうか。もしそうであるとすれば、言語表現にも我々のそういった意識が反映されているはずである。そこで以下では、「高い声」と垂直次元との関係が反映された実例を挙げつつ、共感覚表現理解の裏に隠された「何らかの類似性」について考察する。

#### 4.2.1 「高い声」と「垂直次元」との関係

先ずはじめに、次の例をみてみよう。

- (9) ノーマの花山佳子はブロードウェイ版のノーマにそっくり。特に、頭  
のてっぺんから声を出してるようなキンキン声、ゆるそうな喋り方。

(<http://www.kazusa.or.jp/geno/usr/kohara/play/980110.html>)

- (10) カン高い声で大島田が話しかけると、やはり高音の中島が頭のてっぺんから声を出して答えた。

(<http://www.awa.or.jp/home/oshidari/ABback9808top2.htm>)

- (11) maimaiさんの声が大好きです。あの高音はどこからでているんですか？（中略）あの声はどこからって、わしはむづかしいことはさっぱりばらんですが、きっと頭のてっぺんからに違いないによ。

(<http://hot.netizen.or.jp/trouba-r/madan/faq.html>)

- (12) 「ええ、いただくわ。ありがとう、お母さま」もう少し、何とか、いい方がないもんかねえ。私は娘の才能のなさにだんだん腹が立って来る。頭のテッペンから声を出せばいいってもんじゃないんだ。

(佐藤愛子 (1978) 『娘と私の部屋』、集英社文庫、p. 199)

(9) から (12) の例は、それぞれ「声を出す（あるいは出ている）場所」が「頭

連性が認められるといえるのではないだろうか。また次に示す例もまた、「声」と「垂直次元」との関係性を表すものである。

- (13) 「F—あかんかったんや」といった遠藤さんの声は低く沈んでいる。遠藤さんは声にその時々感情がよく現れる人で、機嫌のいい「元気横溢」という時はかん高い大声になる。(中略)「だんだん欠けていくなあ」「今年はまた特に多いわねえ」私の声も沈む。遠藤さんと話して、声が沈むなんて滅多にないことだ。親しい人の死。(中略) 遠藤さんはそんな話をし、「佐藤愛子のなれの果てはこれやな」電話を切った。最初の沈痛な声はだんだん上がって行って、最後はオクターブ上で終わるのが、遠藤さんの遠藤さんたるところである。  
(佐藤愛子 (1995) 『憤怒のぬかるみ』、集英社文庫、pp. 94—96)

「低い声」においては「沈み」、「高い声」においては「上がる」という表現がそれぞれ対応していることから、ここにも声の高低と垂直次元との関係性が表れていると思われる。

また逆に、「低い声」には次の様な用例がみられる。

- (14) 俳優として知られている武は実はたくさんのCDを出していたんです。低音の魅力、武のその声は私のココロを一番くすぐるのです。(中略) あの地を這うような声は私にとって一番好きな所です。  
(<http://www1.u-netsurf.ne.jp/ayuayu/discography.htm>)

「低い声」が存在するのは、「地」、すなわち垂直次元の最も「低い」場所なのである。

以上、「声を発する場所」と「高い」の基本義である「垂直次元」との相関関係を確認したが、それでは声を聞く「受け手」は体のどの場所で声を受け止めるのであろうか。次の例を見てみよう。

- (15) 「ルミエール！早くしないと置いてくよ！」紅翠の高い声が頭に響く。最悪の目覚めの気分でルミエールが起きる。  
(<http://www.spice.or.jp/~takeshi/project/PG1/hou4.html>)
- (16) どこから聞こえてくるか分かりにくい無指向性の音。「ニニニニニニ」と頭に響く高い音。時折り、ゴリラが吠えるような「グァー」という声も聞こえる。

(<http://www.csis.oita-u.ac.jp/~e09045/a4/kousen.html>)

- (17) (ねえねえねえ、どうしたのお?) (うるさい) (あたしにも教えてよ) **頭に響く甲高い声**に、彼女はしばし思考。

([http://www2.ohba.co.jp/novel/original/data\\_03/03-011/page\\_003.htm](http://www2.ohba.co.jp/novel/original/data_03/03-011/page_003.htm))

(15) から (17) の例においては、「高い声」は聞き手の「頭」に響いており、「受け手」が声を「頭」で受け止めていることが分かる。

また逆に、「低い声」を受け手が捉える場所が、「腹」であることを示す、次の様な例がある。

- (18) それと某中古店でベース&アンプを購入、**腹に響く低音**がメチャ最高!!!

(<http://www.tcn-catv.ne.jp/~hide/nikki.html>)

- (19) 第2回「スピーカ」の巻 共振を上手に利用して**腹に響く重低音**を再生

(<http://www.tdk.co.jp/tjdaa01/daa21000.htm>)

人間の体の中で最も高い位置に存在する「頭」には「高い声」が響くのに対し、「低い声」は、それよりも低い位置にある「腹」に響いている。つまり、相手の声を感じる「(体の)部分」にも、垂直次元の高低との相関関係が認められるのである。

#### 4.2.2 「高い声」の「評価的要因」による動機付け

「高い声」という共感覚表現の成立を支える経験的基盤の可能性として、もう一つ考えられるのは、「高い」における「評価的要因」の影響である。レイコフ・ジョンソン (1986) では、メタファーによって成り立つ概念の一種として、「方向づけのメタファー (orientational metaphors)」を提示しており、上下、内外、前後、着離、深浅、中心周辺という空間の方向性が (この方向付けのメタファーにより) ある概念に空間方向性を与えるとしている。そして、「方向付けのメタファー」の一例である「空間関係づけのメタファー (spatialization metaphors)」のうちの、‘HAPPY IS UP. SAD IS DOWN.<楽しきは上、悲しきは下>’では、‘I’m feeling up.<気分は上々だ>’、‘You’re in high spirits.<上機嫌だね>’、‘I’m feeling down./I’m depressed.<気持ちがかんんでいる>’等の例が挙げられているが (p27)、これら「空間関係づけのメタファー」について、次の様な指摘がある。

—空間関係づけのメタファーは肉体的 (物理的) 経験および文化的経験に

根ざしている。つまり、この種のメタファーはでたために使われてはいるということである。メタファーというのは、経験という基盤があつてはじめて、ある概念を理解する手段となり得るのである。

(レイコフ・ジョンソン (1986)、p. 27、下線は引用者)

そしてここでの結論を‘GOOD IS UP, BAD IS DOWN<よいことは上、悪いことは下>’とまとめている。また次に挙げる瀬戸 (1997) においても、同種の指摘がある。

一般に、「上」や「高」はプラスの意味と結び付き、「下」や「低」は マイナスの意味と結び付く。とすれば、「上役」も「高僧」も、「うなぎの上」も、「高邁な精神」も、逆に「下劣」も「低脳」も、すべて同じことばの世界の住人となる。

(瀬戸 (1997)、p. 22)

これらの指摘をまとめると、「高い」が「プラスの意味」、「低い」が「マイナスの意味」をそれぞれ表すということになる。

これら指摘が「声」において反映されたと思われる用例が、次の (20) である。

- (20) 京都大学霊長類研究所の正高信男助教授の実験によれば、高さを変えた母親の声を左右両側のスピーカーから乳児に聴かせた場合、高い声がするほうに顔を向けることが多いことがわかっています。これはスピーカーを逆にしても同様の結果が得られることから、乳児は高い音に対して強い関心を持っているのではないかと考えられます。たとえば、母親が乳児に語りかけるときは、あたかも乳児が理解しているかのように、ゆっくりと抑揚をきかせて高い声でしゃべりますね。どうやら乳児は、同じ言葉でも高い声だと自分に向けられたものだと理解しているようなのです。(最相葉月 (1998)『絶対音感』、小学館、p. 86、下線は引用者)

ここでは、母親が赤ん坊に優しく話しかける声を「高い」としており、高い声がプラスイメージに結び付けられていることが明らかである。逆に、「低い声」ではどうであろうか。

- (21) しかるとき大切なのは、ガミガミいわず目を見つめ低く、強い調子で

しかること。威厳をもったしかり方は、犬にとって一番恐ろしい。

(森脇和男 (1995)『マンガでわかる愛犬のやさしいしつけと訓練』永岡書店、p. 108、下線は引用者)

- (22) また、チャイコフスキーの作曲した第六交響曲〈悲愴〉などは、だいたい交響曲のフィナーレは、観客が拍手をしやすいようにグングンと盛り上がり、昇りつめたところで、ダダーンと盛大に終わる作品が多い中で、この絶望的交響曲は全く逆で、それこそ死を予感しているかのように、最後は盛り上がるどころか泥沼に引きずり込まれるようにどんどん落ち込んでいき、不気味な最低音部でピアノシモで終わっている。まさに死の暗示だ。

(富田勲 (1993)「解説」、手塚治虫『ルードウィヒ・B 第1巻』小学館文庫所収、p. 251、下線は引用者)

(21) (22) においては、先の「高い声」とは逆に、「低い声 (音)」は「恐ろしさ」「不気味さ」「死」というマイナスイメージと結びついている。このような例をみると、「高い声」「低い声」という表現の成立には、先の「垂直次元」による動機付けに加えて、「評価的要因」が関わっている可能性がある様に思われる。

以上の分析から、「遠隔感覚内」、つまり「高い声」の動機付けを支えるものは、「垂直次元」と「評価的要因」の両方が関わる可能性が予想されるが、その他の要素についても検討する必要がある。例えば、「高い声」とはもともと「声の大きさ」を意味するものであった。

たかし【高し】⑤音や声が大きい。

「ぬばたまの夜さり来れば巻向の川音ー・しも嵐かも疾き」〈万1101〉

「風ー・く辺には吹けども妹がため袖さへぬれて刈れる玉藻そ」〈万782〉

(大野他編 (1994)、p. 791)

この用法は現在でも残っており、現代語を扱う次の辞書においても、「高い声」に「音量の大きさ」を意味するという記述が認められる。

音・声や香りなどがきわだつ様子を表す (⇔ひくい)。

- (2) ①何度練習してもこのたかい音が出ない。②ほくはソプラノのたかい声は好きじゃない。③しつ、声が高いよ。④テレビの音をもうちよっとたかくしてくれないか。⑤部屋に入るとバラがたかく香っていた。

- ①②は音声の振動数が大きいという意味、③④は音量が大きいという意味である。⑤は香りがきわだって発散しているという意味である。  
(飛田他編 (1991)、pp. 336-337)

以上から「音量の大きさ」、つまり「顕著性の高さ」が「高い」に関わっている可能性がある。つまりそれは、次に示す様な、香りが「強く」匂う様を表す「高い」と平行するものである。

- (23) J Rのキヨスクでも買える、スイス製の飴がある。ミントがよく効き、ハーブの香りが高い飴で、家内はいつもこれをハンドバックに忍ばせている。  
(柴田 (1995)、p. 82)

従って、「高い声」などの「遠隔感覚」内における意味の転用については、複数の動機付けが同時に存在する可能性があるといえるのではないだろうか。

## 5 まとめ

以上、本稿では、従来「共感的比喩」と呼ばれてきた「五感内の意味の転用」について、「接触感覚から遠隔感覚」と「遠隔感覚内」の二つに大別して考察した。その結果、前者においては、「触覚」から「視覚」への転用に、触覚領域での経験を基盤とするメトニミーがその転用を支えているという点を指摘し、従来「感覚論」等で主張されてきた「視覚の触覚性」説を言語事実と共に確認した。また後者においては、ケーススタディーとして「高い声」を分析し、「基本義（垂直次元）による動機付け」や「評価的要因による動機付け」などの、複数の動機付けが同時に存在し得る可能性を指摘した。

従って、「共感的比喩」<sup>メタファー</sup>と呼ばれてきたものは、メトニミーなどの異なる比喩をも含んだ、複数の意味作用によって成り立っているということになる。ここから、従来の「比喩の一種」という見方は妥当ではなく、共感的比喩は「感覚間の意味転用」という「現象のラベル」として捉え直されるべきであるという結論が導き出される。「感覚間の転用のメカニズム」に関する更なる検討は、今後の課題とする。

## 引用文献

- 国広哲弥 (1989) 「五感を表す語彙—共感覚的の比喩体系」、『月刊言語』18-11、大修館書店。pp. 29-31.
- 佐々木正人 (1987) 『からだ：認識の原点』、東京大学出版会。
- 柴田 武 (1995) 『日本語はおもしろい』、岩波新書。
- 佐藤信夫 (1992=1978) 『レトリック感覚』、講談社学術文庫。
- 瀬戸賢一 (1986) 『レトリックの宇宙』(MONAD BOOKS 48)、海鳴社。
- (1997) 「拡大するメトニミー」、*PROCEEDINGS OF THE TWNTY-FIRST ANNUAL MEETING*. pp. 67-77.
- 丹保健一 (1990) 「五感語彙の多義性について—多義の意味的広がりをめぐる—」、『金沢大学語学・文学研究』19、金沢大学教育学部国語国文学会。pp. 12-16.
- (1991) 「多義語における語義の区切り方をめぐって—位置形容詞「高い」「低い」「遠い」「近い」の場合—」、『三重大学教育学部研究紀要人文・社会科学』42、三重大学教育学部。pp. 11-32.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味用法の記述的研究』(国立国語研究所報告44)、秀英出版。
- 武藤彩加 (2000) 「日本語の『共感覚的の比喩(表現)の方向性』に関する考察」、(日本認知言語学会設立記念大会(9月9日)における口頭発表及びハンドアウト)、於慶應義塾大学。
- 初山洋介 (1994) 「形容詞『カタイ』の多義構造」、『名古屋大学日本語・日本文化論集』2、名古屋大学留学生センター。pp. 65-90.
- 山田 進 (1996) 「事物・概念・意味」、『言語学林1995-1996』、三省堂。p p. 1095-1107.
- 山田仁子 (1993) 「—言語は感覚の内視鏡—共感覚に基づいた形容表現の分析」、『HYPERION』40、徳島大学英語英文学会。p p. 29-40.
- コンディヤク、E. B. (加藤周一他訳) (1948) 『感覚論』、創元社。
- リーチ、G. N. (安藤監訳) (1977) 『現代意味論』、研究社出版。
- レイコフ、G. & ジョンソン、M. (1986) (渡辺昇一他訳) 『レトリックと人生』、大修館書店。
- Berkeley, G. (1709) *An essay toward a new theory of vision*. Everyman's Library, NO. 483. Dent.
- Taylor, J. R. (1995) *Linguistic Categorization : Prototypes in Linguistic Theory*



(*Second Edition*). Oxford : Oxford University Press (Clarendon). (辻幸夫訳 (1996) 『認知言語学のための14章』、紀伊國屋書店)  
大野 晋他編 (1974)、『岩波古語辞典』岩波書店。  
飛田良文他編 (1991)、『現代形容詞用法辞典』東京堂出版。

## 実例の出典

- ・ インターネット上公開されているホームページ (検索エンジンは ‘goo’ 及び ‘Yahoo! Japan’。各URLは、<http://www.goo.ne.jp/>、<http://www.yahoo.co.jp/>。)
- ・ その他、年号、出版社の記載していないものは、『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』(1995) より引用。